

# 校訂『鷹三百首（摂政太政大臣）』（上）

遠藤 和夫

## 凡 例

一、本書は、宮城教育大学附属図書館所蔵の「元和九年壬八月吉日書写」の本奥書のある『鷹三百首』の写本を底本として同系統と目される宮内庁書陵部所蔵の一本（函号154322）と内閣文庫所蔵の『後京極摂政鷹三百首』を用いて校訂した。

一、翻刻にあたって底本の面影を出来るかぎり伝えることに努め、底本の一行をそのまま一行に翻刻した。印刷の都合上、二行にわたる場合、途中で切ってその行末に「↓」を入れ、次行に続くことを示し、次行は行頭三字分を空格にした。100番は注文にまぎれているので、この部分は特別扱いにした。

一、通読しやすくするために、句読点と空格を私意によって加えた。

一、底本の誤字と思われるものは、傍線をもって示し、正しいと思われるものを内閣文庫本によって（ ）で括弧で示した。かなづかいは誤字とせず、底本のままに翻刻した。

一、脱字・脱文は宮内庁本によって補い、（ ）で括弧で示した。

一、底本の衍字はへゝで括弧で示した。

一、底本に片仮名で記されているもので、特別意味のないと思われるものは平仮名に統一した。

一、語句に異同のある場合があるが、底本の本文を伝えることを主にして、本校訂本では無視した。別途作成する校本について見られたい。

一、底本の丁付けを「1才」「1ウ」のごとく、その始めに記した。

一、和歌の頭には、1～300の番号を付けて順番を明示した。

付記、本書の公表にあたって、宮城教育大学附属図書館、宮内庁書陵部、国立公文書館当局から格別のご配慮をいただいた。ここに記して御礼申し上げます。

「対校『鷹三百首』」(第三十五集(文系編)所収)補訂表

(頁・段・行) (補正本文)

三・下段①

…武さし野…  
蔵・

一六・上段⑧

…云ながら  
て掘取かふ也

一九・上段①

經緒のことなり  
事・

⑨

足の三つある

二一・下段⑦

ぬ程に

二七・上段⑬

わし八貝の

三四・上段⑬⑭

青藥

鷹三百首

摂政太政大臣

〔1才〕

抑 鷹と云ハ 彼やハた八幡の霊像をあらハし、

其家のめひを雲の上にほとこすと云り。先 左

右の眼ハ 日月の尊形をあらハし、身よりたな

さきの羽ハ 両かいのまந்தらを頭 是なり。左右

の爪ハ 陰陽、尾ハ 十二因縁をつかさどつて、其上（の毛）

の数をハ 大日経の根本と云り。先 源 右大臣 唐

よりも鷹を請取、平の侍（左府）に是を□（傳給ふ）。其後、しろ

をハ八幡の尊形と云り。赤鷹をハ神明の尊跡、  
〔1ウ〕

紫鷹ハ春日の明神の尊形（也）。何に付ても、符替

に私有事なし。在原を（氏）にましろの鷹を用

るハ住吉之儀也。さの鷹をハ家にても鈴をさゝす。

たとへハ同氏よりさかるくらいなりとも、我より左へ（よけ）

馬上（又）かち鷹なりとも、如此（かやうに）つかふまつり、其家を

しるへきにや。鵜のたかハ鈴を指たる也。吾より

右ならて其家おたゝすへし。四家八家ともに

鷹を以て 其名をあげへき也。不断 手なるゝ事

〔2才〕

ハ密経大日経を手にふるゝと可意得にや。我

家も 武家にも 鷹の骨すいをしらす。青鷹 隼

小鷹以下を三百首につゝめて家の為に置候。

可秘云々

春五十首

〈摂政太政大臣〉

〔3才〕

1 立春の朝の山を詠れハ雪間を遠く帰る白鷹

たとへハ正月十一日ニ鷹は門出ゝなすといへ共、蒼鷹

ハ一日の朝 八幡の社に有と申事、奈良の御門

の被仰傳也。又哥の面も 雪の蒼鷹と讀也。姿

面白にや。

2 春草を分の羽風青けれハ鷹共しらすたゝの（ぬ）村とり

是ハさる（春）野ゝ鷹およくつかひ入（て）見たる也。鷹の

逸物 草きハをはなれす。おのれと羽風 はの（色も）

青けれハ、取りもみまかへぬると讀り。

〔3ウ〕

3 詠やる花の杪にゐる鷹ハ木の本伏の草や知覧

鷹のい(あ)木とて、いか様ニも鳥影を見おほせて、中の

鷹(鳥)ハ杪おはなれす候。鷹飼お(す)きおとさす。さし

ゑをも見せず。木の本の鳥をたてんと計 かせく

事ハ木の本ふしの鳥を知らつかふまつるにや。

4 梅か枝に羽風もしるく匂ひ来て霞を渡るのへの荒たか

(あら鷹の儀)面白也。其故ハ 鳥にかけはくれ、たとへハ荒鷹の

咲梅かえにあらんハ 誠に羽風も匂ひとつかふ

まつる事(はむと也)、↓

あらきと云字なるにや(事專一也)。

〔4才〕

5 忍ふ中文字習(すり)草を(分)迷雲雀狩たつ野邊の鶴(はい鷹)

彼のもち習草、哥道におひて秘事也。是ハ麦と

いへる物也。かの文字すりも、此青葉をもえたし

につかふまつりてするといへハ、忍もち習石と讀

出したる事也。又春の野にたかなとをつかふニハ必

麦の中より狩立る事かなハしと也。もち習

草とハ青麦の事也。

6 はなれえす文字習(すり)草を鶴の(人)やりならす分てこそ入(れ)

(此心ハつかハぬ鷹也。たとへハ)

生(れ)来より青麦の中ニハ雲雀の住へきとかねて

〔4ウ〕

つかハね共、彼中へ入は ひとやりならすと申也。我と

入言<sup>ニ</sup>て 哥<sup>ニ</sup>も此言を用侍<sup>ニ</sup>や。

7 雉子鳴泪のつらゝとけ初て山路を遠く出ん(る) 箸鷹

此哥<sup>ニ</sup>野きはの羽と申事、野きハにて鳥をみか

くし、羽をつかふ。かへつて舞あかる事也。彼雉子 冬

野<sup>ニ</sup>かり残されたるか 落す泪 ことくく冰は

てたりしか、今たんき(暖氣)を得とけ、心安きに、又山

路を鷹の出てかりつくされん事哉と泪をおとす

苦みふびん多候にや。

〔5才〕

8 岡野邊に獨りはなれて飛鷹のたけき心の春(に)そ有けれ(る)

羽くらへの鷹と申ハ女鳥男鳥の羽をくらへて妻(になす)と

云心あり。然間 今野邊を一羽飛鷹も羽くらへを

つかふまつりて、妻を定めかと云儀をたけき心の

しられたりといへり。

9 今日昵月半になれハ荒鷹の山飛越て古巢にそ入

睦月とハ正月の事也。半とハ中旬、十一日（より）巢山お尋ぬる

物なれハと也。こそも我かけたりし巢お尋入と也。

10 葦咲野にハ雉子の又鳴て鷹のゑ聲をうらみこそすれ  
〔5ウ〕

これをすみれときゝすハ知ると也。葦の露おふく

して雉子ハ子を持とみえたり。葦も咲、我心も

慰へきと取たる所ニ鷹野をかけつて鳴聲ハ

哀をもいかゝなすへきにや。

11 とてもみのゝかれ間布に鳴雉子鷹ある山の草かくれして

此心も終ニハ鷹に取るへきにと讀也。かゝるにつけて

身ハはかなき物也。わつか成草に身をかくしても

とても鷹ゝ入山なれハ、のかるゝ事有ましくニや。

12 筒氣ある鷹の心のしりたくハ鏡ニいきをかすませて見よ  
〔6オ〕

あか鷹なれハ大事といふ。然間 其鷹の心のくるし

けなる時ハ、かゝみを箸のきハへよせて、いきをあて

曇ぬ時ハとうけ（に）よハると思ひ、其れうちをなす

へし。曇る時ハとうけの内よきとしるへし。鷹の

めにハ物をかきしてひそかに是をよせ候へく候（すへき）にや。

13 霞野にふかく入きの鳥あらハ鷹よりつよく土（大）をやるへし

是ハ皆鷹師の知事にてひはんニ不及にや。

14 はなけある鷹とおもハゝ下もへの葉の草の匂ひきかせよ

かの葉草と申ハ、民家ニにんにくといへる物ニて候。  
〔6ウ〕

鷹のためにハ彼匂ひ秘草ニて候。然間 葉の草と

よめるニや。

15 今日こへて（毎に）山とひ越て箸鷹のかすむ末野に日数をそふる

此心ハ、よき鷹と申ハ、我と鳥を取のかしたる所

おハ七日はなれすして、ついに本意を達ると云り。

扱 けふ ことに山を越てかすむ野に日数をふると

申ニや。

16 羽くらへの鷹の心のたけきおはいかなる鳥の恨はへらん

勝を妻と め鳥男鳥羽くらへすると（め鳥を雄鳥の羽を↓

くらへて勝を妻になすも終ニハ鳥を〔7オ〕

取、子にもふくせんと思ふ所をはいか成鳥と申ニや。

17 下萌の田つらの草おつみ持て虫さす鷹の羽をや洗ハん

かの田つらの草と申ハ、にかく、みしかき草也。かれを

煎して羽を洗へハ、必しも羽くきの虫 たいさんすと

いへり。常の言葉ニハむし付(た)て草とかれをいふニや。

18 霞しく野山をわけて箸鷹のいか成妙たつね行らん

19 とおと三にあまるをほめよ箸鷹の羽(尾)の上かすむ夕暮の山

十と三にあまるとハ、十三尾の鷹也。十三より猶うヘニ

あらはほめよと云儀也。かすむとハ尾の多ニて候。尾の〔7ウ〕

多しくらふたるを、夕くれの山かすむなどのやう

にたとへて候ニや。

20 咲つゝく山吹色に箸鷹の成も符替ならひとおしれ

是ハ山ふき符とて鷹の大事也。稀にもあれる

時ハ 神のつかひ鷹とて人ハこのまぬ事ニて候や。

しらてつかふへしと云儀を教んためにかわる

ならひ(と)しれと申候ニや。

21 つゝし咲岩本すけのかりくらしつかるゝたかの帰さの山

此心ハつゝし咲春の季也。かりくらすといわんために〔8オ〕

岩本すけと申候。筆ニ鷹のつかれたる山を歸さ いそく

と云儀(きとくなり)。

22 箸鷹の霞の内ニ聲立ていか成鳥のゆかけみるらん

此心ハ鷹のゑこひをする事ハいかやう成鳥の行影

をみたるそと讀める迄也。或人 弓のかけと申事

大ニひか事也。唯行影なり。

23 手はなちの鷹の心お春かけてまけかちおほへよく(や)つかはん

これも手はなちにおくれたるハいつまでもかひ

なきなり。然間 たはなちの時より鷹の心を↓

な(そん)せよと〔8ウ〕

なり。かんにてハかなひかたく候ニや。

24 さころもの上毛閑に霞日も居こそ出れ野邊の箸鷹

さころもとハ鷹の尾の上の毛也。みわかすといふ共、

鷹出来心あらハ居て野へ出てよと讀るニヤ。

25 箸鷹のなら尾なら柴かすむ日も身を置かねて雉子なく也

たとへハかすむ日なとハ、東西見分たくと(し)、しかりと

いへ共、鷹に雉子のかれかねたる所を越(我)命いく

ばくそとなく成ニヤ。

26 山水の霞流に影おちていか成空に鷹のとふらん

〔9才〕

先 此哥を以て鷹こと鳥にかわるお知へし。余の

鳥ハ雲霞を隔、飛ニハ水ニかけの行もみえす。鷹ハ

いくゑのそひき物をへたてゝも、其形 水ニうつらふ

と云り。ひとハ鷹の行とも跡をみつつけす、筆

に下水ニ影のうつるおみれハ、鷹也。さて、姿ハ鷹ハ

霞ニかくされたれハ、いか成雲お飛と申ニヤ。

27 鷹の飛夕山鴉巢出て笑心もうきおやハしる

此哥ハ山からすのはかなき心を讀る也。たとへハ云こと

単にうきよりもおこる也。この鳥かち(愚智)にして 〔9ウ〕

鷹を笑、身をすつる事、はかなきたとへたるなり。

からすの巢 春之儀也。

28 あかねさす春の日数(影)のしつけきに雲より上お鷹のとふかけ

たとへハあかねさすと云事、春の日なとの入方の時

ハかならずしも光あかねのことし。こゝをさして紫

の雲あかねさすと讀めり。たとへハ春の日の静成ニ

雲の乱て世におほふことく、鷹の影あかねさす

日ニみれハあきらかなれハ讀るニヤ。たとへハ此三百

首の間、何も哥連哥の縁の言永(よめる)ニ候。

〔10才〕

29 飛鷹の羽風もよハく霞来てのへの一木お立もはなれす

定家公(卿)の曰、羽かせもよハくと讀たるハ、霞の上か、又鷹

の事ニて候や。有人の云けるハ、鷹の羽ハよハく、霞ハ

つよきと也。定家卿の曰、此鷹ハ霞ニよハるとみえた

り。随分霞お分、遠山よりつかれ来ハこそ、下ノ句

一本を立はなれすと讀るなれハ、一定霞ハつよく

鷹の羽ハよハきと聞ニヤ。此節可用候。

30 身のしゝのつまるとみへハ箸鷹にやき白はいの湯をそゝくへし

(此哥九条院ともかた住吉に) 通夜してゐるにこの心を↓

夢の告有。下向<sup>ニ</sup>成<sup>レ</sup>(して)

禁中に御披露有けれハ、鷹飼<sup>ニ</sup>仰付て、そのこと

く<sup>ニ</sup>なさせ候へハ、鷹のし<sup>ゝ</sup>おきなおつてゆるや

かによく出来といへる。やき白はいとハ、けしやうの具

そく、白物とてあり。彼をぬるゆにく(つ)ろけおより

くひきハの毛のあひまでそ<sup>ゝ</sup>けハ、羽のくきより

身の内へ通り、必し<sup>ゝ</sup>ゆるやかに成申<sup>ニ</sup>や。住吉の御

誕<sup>レ</sup>(託宣)のす<sup>ゝ</sup>き湯の事かくのことし。

31 霞布山ち<sup>ニ</sup>鳥の伏ならハ先鷹犬の手なハ許せよ

哥ハ聞たることし。霞の内<sup>ニ</sup>鳥伏たらん<sup>ニ</sup>ハ善悪見分ら  
〔11才〕

れましき也。さやうならハ鷹をハやらす共、犬をハ

はなてと也。犬より先<sup>ニ</sup>鷹を出せハ、霞かくれに犬あや

まちの有へき<sup>ニ</sup>と讀り。用心也。

32 引留る鷹のせき緒の永日に尚くりかへし野にて(も)出たる

此心ハ鷹よくと<sup>ゝ</sup>のひ定て日の内<sup>ニ</sup>度ものに出

んと云事也。せきおとハへ緒の事也。せきお<sup>ニ</sup>ついて

又野<sup>ニ</sup>出たると云へきを、せきおくりかへすと讀り。

33 ゆるし毛のかひなからに(ん)や箸鷹のかすめるのへお↓

向<sup>レ</sup>(飛)そかねたる

許毛と云事鷹の毛のそう名なると云り。家<sup>ニ</sup>てハ風切  
〔11ウ〕

の羽を云り。見寄たなさき共<sup>ニ</sup>末(に)あれハ、許毛共 是

を以て風をしたかわせ飛か、よハけれハこそ霞の内<sup>ニ</sup>

おも飛かねたるとよめる也。

34 箸鷹の身寄もみへぬさの雪(すふる春)の(ふる野)に残る(浅く)人

そ出たる

身寄と見へぬとハ雪のき(春)なからつよくふるを云也。餘の

雪<sup>ニ</sup>ハ鷹かいもかなわぬ<sup>ニ</sup>出たる心あさしと讀。又定

家の曰、雪の深事おハ、此鷹かいも存たるか、鷹

之よく出きて候へは、野居などにてつかわんと出た

る事お 野<sup>ニ</sup>あさく人の出たると申<sup>ニ</sup>や。  
〔12才〕

35 降霜<sup>ニ</sup>春のし<sup>ゝ</sup>お狩くらしおとろかしハに鷹や入覽



かのしとゝかりと申ハ、十五より内の殿上人 小たか

にてかる也。さなからさへかへつて霜(雪) ひと通りふり

何となふ小たかのねくらつらき夜の明方なと

に小たかすへ出してかり候。しとゝもさながら寒けれ

ハ、おとろかした、むくらの中にかくれたるおな(お) い

出さんとおとろの上鷹の入かと讀也。しとゝたかニ

犬付ましくとや。

36 長目(閑)なる日を(比そ)とて箸鷹の雲より高き杪にやとふ [12ウ]

鷹ハ心はよの鳥よりかしこき也。嵐すまましき

時ハ 我身をたすけんとて高くハとハぬ物也。然間

長閑なる氣を得て雲より高く飛といへり。聞

取たることし。

37 春雨<sub>ニ</sub>なれるつはさおほしかねて梢<sub>ニ</sub>獨ゐたる箸鷹

鷹ハ何の鳥よりも羽をこやらすなといへり。たつ(ると見えたる)

なれハなんしと云心也。はねをほさんかために高き

梢と(に)て日を待といへり。付合もるゝかたなく候。

38 下萌の若草山<sub>ニ</sub>分入て小鳥なやふ(ま)すはしたかのこゑ [13オ]

哥聞へたることし。若草山名所也。春日野にある

鷹ことり付へくとや。

39 鷹かける苗代かきのかけよりも餘多に鳥そ忍音になく

かのなわしろかきと申ハ禁中に有。たとへハ飛鳥井

のほとりに柴かきおゆひまはして、其外<sub>ニ</sub>鳥やを

かまへし也。柴かきの内<sub>ニ</sub>ハいけゑのためにて、小鳥の

数をおかれしか、彼鷹の春の季を得て とはふ

こゑを聞。小鳥の時節到来をなけく所 作者の

愛をさして忍び音に鳴と讀たまへり。ふびん成<sub>ニ</sub>や。 [13ウ]

40 哀にも小鳥村鳥聲<sub>く</sub>にさ(春)の末野や鷹いとふらん

彼小鳥村鳥哀と讀事ハ、たとへハ冬こそかりくら

され、氷とちられて物おもひ侍り。せめてハ春野

に成て心をのへまほしくおもひ(ふ)ニ、すこなる鷹

とて其えをかけて廻ハ小鳥村鳥のたかおいとふ(と)讀にや。

41 霞しく夕部の雲の宿山明行袖にすふる箸鷹

此哥も聞えたるまゝ也。鷹の宿山と云事 不存の鷹

飼、冬計といへり。但當本にハ日暮て、そのまゝつかひ

入て山宿事何も有へきとみゆるニヤ。

〔14才〕

42 急雨の跡に一村露落てかすむ上毛やおもき箸たか

此哥も、雨露の後 箸鷹の毛おをもかるへきとよ

むなり。このまゝ也。

43 入會の鐘も長閑にきこゆれハ帰さに成ぬ野邊のたか飼

是も哥ハ聞たるか筋目也。鷹かいの夕部になれば入

會の鐘をきゝ、我かかへるさをもとむる事めつら

しからぬニヤ。

44 罪科もあらしと思ふ箸鷹をかすめるのへに居出ることゑ

此哥大方聞たることくに候。雖然 鷹ハ兩部の大日を

〔14ウ〕

司取て、能つかいえてハ 後生菩提の為なり。唯

鷹之取鳥おあちわひなく自然と用、我を忘

るゝやうにつかないし候ハ、必鷹の奇特あるへし。

天氣長閑一とおりかすむさかいに鷹をすへ出シ

小鳥に取かふ時の面白さハたとへん方なしとつかふまつるニヤ。

45 羽風なき鷹か袂を立はなれ雲雀や雲(空)に舞あかるらん

(はとひとハ鳩と云字を書へし。)鳩のことく羽をきく鷹お↓

羽とひとひ候にや。羽とひ

なき(と)ハ鳩ほとハとはぬ鷹也。如此羽もきかぬ鷹を

居たる袂より雲雀の立てとも、↓

こんれ(本より)羽よハき

〔15才〕

鷹なれハ、かれを取へすとニヤ。

46 さわらひの手をあくる間にそれ行ハ山忘れせぬ荒たかそかし

足緒をぬく事有。架より手へうつす時、如此のふる

舞あれハ、手をあくる間にといへり。さわらひハ手

の枕云葉也。かゝるにも荒鷹之ほと可成ニヤ。

47 取渡す桃の盃めくる間にそれ行鷹に置ゑ見せなん

哥聞たることく鷹ハわつかのすきにも遊心ありと

いへり。然間常に置ゑをもと云心ニて、桃ハ春の

木なれハむすひ候ニヤ。

48 下水ニ移ふ影も霞けり高き杪のはしたかのこゑ

これハあるひと鷹おうしなひ尋ぬれ共、あハす。

折節木の根傳に流行水をみれハ、鳥の影の

移ふ。さて杪を詠たふおもへとも、霞のかゝれハみ

えず。只偏ニ聲を以知と讀ニヤ。

49 浪の上に誰（か）箸鷹ハ居ぬれハ須磨の浦半に通ふ釣（鈴）舟

かの釣鈴舟、春季也。源氏の大將 明石の播磨

守かむこに成たまふ。明石より季を舟につなか

せ須磨へ通けれハ、皆浪の面、鈴の聲を讀ニヤ。

末の春と可心得ニヤ。

50 立春の餘波を見て著たかの飛影よハく林にそ入

立春といふ事、正月一日おもいへり。それハ春のあな

たよりたつ事、是ハこなたより春のまかり候。なこり

尾といふ事ニて候。飛かけよハくとハ巢山をもとむとし

て ちからをよハリもてきたるを つかふまつる事奇特にや。

たとへハこの内よめる季の物ニ何事おも付へき事ニ而候ニヤ。

夏五十首

51 行雲に鷹の巢山や帰るらんしらぬ小鳥のふもとにそなく〔16ウ〕

鷹の巢山ハ夏の季也。雲のあつく立おほへハ、鷹

の入山共しらすして、麓ニ小鳥の音おなくかと

讀事ふびんニヤ。

52 茂ル葉の木影に鷹やかくるらん嶺ニ鴉のあまた鳴聲

たとへハしける葉の中なとに鷹のいたるおハこなた

よりみしらす、嶺ニ鴉あまた鳴ハ もし鷹ゐたるかと

けん所の心とてニヤ。

53 鳥屋鷹に落しかねたるものならハまとおにゑかふ習ひとおしれ

此道の本意なり。餌をかわぬ故に毛お落かね候。此やう〔17オ〕

成儀を能存て鷹をかいたすけへきニヤ。

54 鳥屋鷹のたけき心もしられたり毛なからかへる打ゑもそ有

常よりもとやかふ鷹のたけきお讀也。毛なからかふとハ

常に作拵候餌を そのまゝあたへぬれハ、安く食けれハ

たけき心のしらるゝ（と）讀事奇特ニヤ。

55 片毛より鷹の心ハしられたり両毛おさまるとやのうち哉

片毛、始のとや也。諸毛、次のとや(なり)。先かたけの時、↓

羽を落

兼たるハ諸毛迄も不<sub>レ</sub>調といへり。然間(かた)毛の心持肝要にて候。諸毛、片毛と皆あつかいニ依て治る物ニや。〔17ウ〕

56 鷹のために土餌ハとくと思ひしれ毛をまた残すとやの内そも

たとへハしゝのたかきに土餌おかひ候へハ、しゝハひいて本のしゝに也、身かろく也、鳥によくあひ候とや。たかなとハ

単(に)とゝのへたてゝ毛をよく落へきに、なんそすかし、ゑをかわせ、うち調ハすしてハ、毛羽も調かたく候。幾<sub>いくはくも</sub>

もとや鷹おハ内外にしゝあまるやうにかふへし。

57 箸鷹のたけき心おとやの内ニかひなれてこそ思ひしらるれ

是ものちを思ふ哥也。たとへハふたん馴すしてハ、鷹の

心しれましく候。依て鷹のたけきところをも馴すハしら〔18オ〕

れしと讀。能思ひ合て鷹をいれ候ハん時も、その分

おつかへと申候にや。

58 黄鷹の心おとやにならハして能ゑを求常にかふへし

小鷹こそあれ、青鷹なとハとにかくに心おうち

のかす事も有。これもやからによる也。然間鷹も能ゑ

のあちをしらせて後にもそのことくにてつかへと也。此

さかいにハ工つかひけいこも入る物にて候。小鷹なとハ氣

なおる事もあれハ、黄鷹ハ始より心を捨かね候ニや。

59 飛影のよハく見へなんとや鷹に落かねたる尾の毛おはしれ〔18ウ〕

是もとやよりして鷹の姿お見ると云に尾のよハき

鷹ハ飛ゑぬ物也。然間、飛羽の弱を以て尾の毛の

落つるおハしれと讀也。先さいかくにもとやの飛事

弱からんニハ尾の毛お落シかねたる故ときいかくしても↓

不<sub>レ</sub>苦ニや。

60 土餌をハ夏おかさねてとやたかにかふ共鳥の一度としれ

此心ハ目(目)の内に時おうつさす、土餌をかふ共、鳥の一度

のゑにハおとる也。たとへハ野山をくる時も鳥をこそふく

すれ。犬なとハあたわぬゑニて候。人間もあたわぬ

食をハ忌事也。これにおとらす候ニヤ。

〔19才〕

61 茂りぬる山飛越て箸鷹の夏野にふかく聲を聞ゆる

此心ハあらハに聞て候。山のしけみなとてことくく

鳥をかりつくして夏野里（へ）出たると讀るなり。

62 ねり雲雀またたてかねて鶴の草の上行鈴の音哉

ねり雲雀ことくくも羽を落し立兼て草

の中をつたひまはるハいへり。たとへハ彼中の雲雀

鷹の鈴音を聞、立さりにけはやと思へ共、鷹も（草の）

上に居、又我羽もなくて立かねたるハ世に哀成事なり。

63 梅の雨に立さハきぬる箸鷹ハ杪のいつく求め行らん

〔19ウ〕

たとへハむめの雨ハ五月ニて候。誠ミの雨ニあらす。単梅の

こほれたるを云也。じくはい（＝熟梅）などの杪をはなの下に

落ハ世につよく聞候。鷹 是に驚、所をはなれ、い

つくの方に行とたちぬる心 哀なるニヤ。

64 橘の身よりの毛色替こそ名のある鷹のしるし成けれ

たち花のけとハ、みよりの風切の羽より三めをいふ。

余の羽ハつねの毛の色也とも、かの橘の毛かわらすハ、名の  
ある鷹と可存ニヤ。

65 蚊遣り火をさしてもふかくいとふへし鷹のとや有↓

賤かとなりと（に）

〔20才〕

偏ニ鷹ニハ蚊をいとふと見へたり。賤山かつハ 不断 かやりを

焼、せいろをすこし候。扱 賤かとまりの鷹のとやかなら

すしも蚊やり火さへこなたへなひき来りてハ鷹の

ためにとくと讀候事 煤煙をいとふニ似る。

66 夕兒の花の毛なミを先みせてこ（は）やかわりける（ふの）架の荒鷹

夕顔の毛とハ身寄の風切より四番めニ有。とやニて 先 此

毛より落始候。然間 夕かほの花の色を讀也。又毛な

ミともつかまつるにや。

67 符かはりの鷹と思ハゝとやの内ニかり成ゑおはかふへからすや〔20ウ〕

此哥も鷹をよく執せよと也。符替の鷹ハ とやの内ニて

もわろくかひ候へハ、一かう 唯鷹に成候事もあり。然間、お

ろか成ゑをハかわぬ事ニて候。餌に依て鷹のせうれつ

見え候。相かまへて能餌を求てかふへく候。符替ハ大キに  
ひそう有へきにや。

68 むまれしハ一なれ共鷹の子を巢守に残す心しらはや

一なるも同様なれ共と云儀也。鷹の子ハ大ニなれハ、三四也。

常ハ二もつ物にて候。如此有ニ残置て、雨露にうたす

事ハふひん也。其心 いかやう成とたかに尋はやと↓

云ことなり。

〔21オ〕

69 かひなきを巢守に置ハ鷹の子の羽の上にこそ心しるらめ

此さた大ニ大事ニて候。鷹ハ子を持あつめて、其後玉子を

我羽の上に巢の内を十二とはしり廻、羽よりもころ

ひたるをハそたてゝも弱かるへしとて巢守になし、

徒ニ朽させ候。扱こそ羽の上に心おしるらめとハつかふまつ

り候へ。世の中も子をためさんニハ、如此ありてこそさかふるも

おとろふるもはやくみおほへへく候ニや。

70 長雨も鷹の巢山ニいとひかねかさして守や柏忝の葉

此哥ハ昔の加(嘉)例を引とみえたり。其故ハ↓

唐より船ニて

〔21ウ〕

鷹を渡されしに、大雨きおひ来り 浪あれ 舟中のは

けしき事申候ニたへとへたり。其時、舟のもとに柏をしけり。

この枝を取あつめ、鷹の上にかさして雨をふせき、たか

をたやすく此國へ渡しぬ。又然間 鷹の架も上の架

申ハかれといふと見えたり。爰ニても我しめおく山の鷹

の巢にいたく雨いらは、其子も朽ちぬへきとて先代の吉

例ニ任、柏と忝お巢の上にかさして雨をふせくと云り。

いかさま忝柏に鷹ハ縁深ものなるニや。

71 村鳥の鷹の巢山ニしたしくて昔をかへし羽をを見るらん

〔22オ〕

昔をかへす羽とハ山際にてつかふやうニて候。鳥なとハ山本ニ

不断住馴れ、日影を使ニなし、朝夕住なれたるハしたしきか故ニ

山キハニて鷹のつかう也。(こ)へんの羽を見る事ハ山本に住

なれたる故ニ讀たり。彼こへんの羽をつかひて後ハ其

日野にも出ス。されハ鳥もみおほへせて心安あさりおも

つかふまつるへきとおもひ、友さそひ出て、心をなくさむる

儀を申<sup>ニ</sup>や。

72 山出の鷹ハ小鳥を撫子の花打ちらす羽風なりけり

箸鷹に撫子の毛とハたなさきの風切より二番<sup>ニ</sup>候なり。  
〔22ウ〕

たとへハ風切の腋なるによりて風もつよく當と讀候。先

鳥によく鷹則<sup>レ</sup>（知）音のやうに鳥を取事おも羽風とて

撫子と可申儀<sup>ニ</sup>や。

73 さハかしくうの住杪見えたるハたしかに鷹の巢山成らん

うの鷹にあひてハことになわぬ物とて候。然間 うの

鳥さひく立さわき候ハ、一定鷹の入山成へきかと讀候。

74 ぬれやらぬ蟬の時雨のくらき日も鷹ハ林を渡成けり

せみの時雨と申事ふる物<sup>ニ</sup>あらす。能鳴くらしたるまで也。

不斷ハ林にすめる也。又鷹も其時節林をかけれハ、↓

蟬の時雨

〔23オ〕

降物ならねはぬれやらち<sup>レ</sup>（す）と讀なり。

75 とや出す鷹の日よりおえらふならい風無戸ほそ開初へし

出す日えらふへし。毛も弱くはたとゝのハぬ夏なから

はけしき風の日出し候て、身も毛（も）風<sup>ニ</sup>よハリ、↓

かいなかるへき。風

無日、とやをひらくと讀り。

76 とゝのハぬ毛色をみせハとや鷹にぬくち紅葉<sup>もみぢ</sup>の鳥をかふへし

此心ハとや出した時の儀也。若とや出迄毛を落さすハ小

鳥のもみちをかへと也。ぬくちとハ取あへすの鳥おそのまゝかへ

と申<sup>ニ</sup>や。

77 尾毛共に調かたきとや鷹に能えを求め常<sup>ニ</sup>かふへし  
〔23オ〕

是も聞たることし。常はとやお出して見すハ毛羽調事し

られましく候。とやを出し七日迄ハ能えをかへと<sup>ニ</sup>や。

78 とや鷹のさのみ狂ハかねてよりよハかるへしきの尾の毛をハしれ

此心ハとやのうちにてせひをつからかし、身おもみ、狂鷹ハ

尾羽共<sup>ニ</sup>むら出来り、飛事もかひなかるへきにと讀<sup>ニ</sup>や。

何もとや鷹の習 能えも細く飼へき<sup>ニ</sup>や。

79 諸毛せしこのとや鷹の手はなちに大物おたゝ心見<sup>レ</sup>な（ある）へし

諸毛 二とや也。鷹ハかたけ迄ハとゝのふ色みへす。諸毛の能養

生肝要候。たとへハ諸毛の時、大物にこらしてハ↓

そのまゝ氣

〔24オ〕

おくれをなし、かいなしと云り。能々大物成共、鷹にみせ

近々と打よせ、鷹の羽おつくさぬやうに合て、鳥をくれ候。

そのまゝ其暮にハ在所へ帰、鷹の養性をなし、能々日より

をみて取飼へしとニヤ。

80 鳥屋鷹にさのみ犬をハ好まし唯おのつからつかい入なん

是も四条院被仰しハ、不断犬を以て鷹をつかひ給ふ事

家のすきたり。其後あら犬なれハことをかき、鷹野

つかわせ給ひつるに、雲に舞上、犬のたつるを待候へハ、せん

かたなくて、其後犬なれとも、つかひ給ふと申ニヤ。〔24ウ〕

81 鳥屋鷹のひとけをいたゝるとふ事もくらくかこへる習とおしれ

是ハとやかふ鷹の出てのちことくく人けおいとひ候。然

問、とやおハ不断人のすかたを見つけ候様ニかふへし。

名の鳥とも物ことに初おくせになす物と可ニ心一得ニヤ。

82 餌をかふと人になれぬ様に唯このとや鷹のかきうすくせよ

是前の心也。唯とやおハ垣うすくしてせめてハゑかふ物の姿

成共、不断ハみせよと申ニヤ。

83 垣薄み風をハいとひとやたかに寒きいもおも落しかねつゝ

かきうすみとハウすひゆへに云心也。風の寒けれハ毛を〔25オ〕

もおとさす。あつきニハ毛をつかふまつる物也。このさかい

大切ニ候。風ハいらて扱人影の見ゆるニかまへられ候ニヤ。

84 餌おかひ候へかひなるゝ共とやたかに心許ぬやうになるへし

たとへハふかんの鷹賤、常に申ハ、よくなつき候やうに、いか

やうに候しも(飼小共)不苦とて油断の↓

心を(持、鷹の心を)取そこなひ、後ニハ

おつと有。相構て此さかいより(能々)心得候へし。

85 とや鷹の始めハ能もつよからすよハからぬやうにならわせてみよ

とやにかい出されたる鷹ハ毛羽たどくしくして、かい

なき鷹なとお大物に合不叶候。又とやのニて、かつにのそ〔25ウ〕

むまゝいま新しくみなれ、はやう候へ共、↓

大物おハ取へす、つめハ



もかるゝことあり。そのやう成時ハ大物ゝ↓

つなきゑ(二餌)なととらせ

よと其(二云)儀およハからぬやうにと、下の句に讀ニや。

86 とや鷹の右(身)よりたなき風切の羽おはとの毛と云へかりけり

鷹に外の毛と申習 家の人ならてハしらす。みよりた

なききの末なる羽とて云る風切おハとの毛と云ニや。

87 野をかける鷹の心のたけゝれハ夏山ふかく鳥の鳴らん

たとへハ夏の野鷹はゑをあたへんと尋候程、常よりハ

たけさ まさるとみえ候。扱夏山に鳥の鳴と讀ニや。  
〔26オ〕

88 下涼しかるへき杪鷹の居て草野ゝ鳥やみるらん

これも野鷹か心にて候。うたきこゑたる如、こかけなとに

すみをかる所に杪に鷹のいたるハ、草ふかくすめる鳥お

待かときこへたることくにて候ニや。

89 山本の岩もる水の清けれハ空行鷹の影そ移(れ)る

古人の曰、おほうてう濁水にやとらすといへハ、岩もる水の

清ニ影のやとりたるは鷹成かとつかふまつるにや。

90 夜居より能ならハしてとや鷹の心おるこそ上手成けれ

彼をやたかの心ハ本の荒たかに成といへハ、↓

すへおくるこそ上手成  
〔26ウ〕

けれといへハよく居打事大事と申。そのならハしをし

るへし。返々とやたかハ心野鷹帰る事一定の跡にて候。

91 萍のともしらすハとや鷹の落羽を取てうハ色をみよ

これハ鷹にうき草の毛と申ハ、みよりの方のもゝにある

毛にて候。下へおちてかならす上色の白けれハ、如此讀ニや。

92 萍のその(毛)なみおはいひかへて櫛の毛をハかみのあらたか

彼もゝくたりの毛をうき草の毛と申候。但神の鬘鷹

なとの時ハ櫛の毛と云事鷹の髣にて候。

93 たなききのて先の毛よりふたつめを名そふといふや↓

とやの荒たか  
〔27オ〕

これハたなききの腋の毛より二めをなそうの毛と公けニハ申ニや。

94 夏山しけるならしは落かねハ鳩の生餌をすこせとやたか

ならしはとハ尾の毛也。たとへハならしはおとしかねれハ

なら尾を落す物こそしけると讀り。かやう成時、鳩を生なからとやに入候へハ、かならず其を落と讀ニヤ。

95 土餌ニハうちもかひなく成なれハ鳥の丸餌をすこせとやたか

是もゑなきとてとやたかに土餌計をかハす、必そのしゝかいなく後もよハリ、心有へきと讀也。丸ゑ(と)ハ鳥をそのまゝかへと申儀也。とかくかれるためなれハとやたかニハ↓

鳥葉たるへく候ニヤ。

〔27ウ〕

96 生なから大物入てとやの内ニ鷹のせいおハつくささらめや

これもとやの内ニ鷹にとりかふほと鳥なとを入ぬ事也。

但鷹のせいもよハリ、きもつけ(れ)たらんおりハ、ちいさき

鳥なと取やすきお入て鷹ニきを可付にや。

97 櫛つむ法の古寺鷹のゐて跡をこふとや心あるらん

法の古寺とハ、彼大聖釈尊の御事也。たとへハ鷹鳩

を彼尺尊のおハします所へおひ入たり。鷹、その所

をさらされハ、跡をかふといへり。彼尊我か↓

(身をきり鳩にかけ合て)鷹ニあた

ゑ玉へる事鳩のはかり、これ也。彼鷹ハかゝる縁おきて〔28才〕  
佛の原(便)をえ、この生おかへんと思ふ儀成を、↓

心の有覧と申ニヤ。

98 御法毛の鷹の羽かいにあるなれハとやおも寺といふへかりけり

御法毛とハ、たなさきのかたの腋ニある也。彼毛の有上ハ一定とや成とも、てらをよみ候ニヤ。

99 とやにかう鷹の羽くきのかいなくハ扇の風にまかせてもみよ

此心ハ羽くきつかれてかいなくハ、あふきを以てあおきたて、毛のもろくハその養性おなせといへり。

100 紅の末つむ花の毛なみさへおとしかねたる夏のとやたか

紅の毛ハ頭ニあり。すへの毛ハみよりに有。↓

花の毛ハたなさきに

〔28ウ〕

ある物にて候。是等おとしかねたるハ、ゑのかひなき故とや。

秋五十首

101 一葉より後ハ杪に居る鷹の心のまゝに渡る秋山

これハ聞たる俚也。はもおちぬまに、鷹 其羽をいむ也。

羽の落れハ心の俣に山を渡ると申ニヤ。

102 霧くらき高根の遠を詠むれハ鷹かける覧さハく村とり

たとへハ霧のくらく立こめたれ共、さハく村鳥の聲まき

れされハ、如此讀るニヤ。

103 狩くらす鷹より後に鳴鶉月ニねくらをたかへてもみよ  
〔29才〕

如此之鳥類獸も我が居たる所おハさりかたく候。随分暮

迄鷹にせめられて、様く一なと残みて鷹かいの帰る

跡に鳴也。これも聞付て、又後にかられへき也。夜の内月ニ

成ともねくらを外所へうつして鷹にしられす、

ひるをうつさハ、必鷹かひ可存なれハ、月ニねくらおたかへ

よと申ニヤ。

104 ほろくくと露より出るかた鶉鷹にのかれぬ泪成けり

これもなみたのほろくといひよせたり。たとへハ、夏をた

ちはなれハ鷹もしるましきに、俄露の床をたちかへ  
〔29ウ〕

て鷹にしられ、一定とられへき事哀さ（よ）とひとの

泪お落たる儀ニて候ニヤ。

105 唐衣小鷹狩してかへるにハ露置渡す袖の上哉

これも露置のきぬ着たる也。けん所しても秋の之

をかへハ、あきの露おそてに置かと讀にや。

106 色かへす八千世の秋の紫鷹の白玉つはきならひてそ入

取分紫ハ寿明（命）久し。八千年のよハひお保といへり。但此

鷹ハあつの國より渡る也。遙の浪の物（海の面）を越すてハ必

しら玉のつはきの露をふくして渡る也。さてこそしろ  
〔30才〕

つはきをならふとハ讀たるニヤ。

107 秋の霜ふるやましろの鷹居て虫鳴野へに分そ入ぬる

ましろハ常のひとしる鷹也。露のしろきといひつゝ

けて候。取分虫之鳴事ハ夕部ニて候。夕部ニものへに入る

と讀までなり。

108 もく結衣手寒し諸鶉鷹の羽風をいとひてそなく

鶉にもくむすひと申ハ、毛を落してのち、おいとくの

ハす、尾羽村々成を云り。又衣ハやふれぬれハ、もく度

に結ふと見へたり。一立をハかた鶉といふ。たとへハ毛羽調トリノハヅレ

共、鷹の羽風つらかるへきに、さして羽とゝのいかな

て尾かけもよハけれハ、鷹の羽風をいとふと讀。  
〔30ウ〕

109 はらくと」木の葉数散山里に夕部ハ鷹之渡るおそしる／

うたハ

聞たる也。但、鷹之渡る事ハ木の葉かす散る折節ニ渡る

物なれハなり。

110 鷹かいの草深野に狩くらし尚鈴虫の聲おこそ聞

これも野々躰にて候。

111 夕されハ野に賦鵜こゑたて、鷹かひ急野への遠方

夕されハと云事哥道につけても此儀あり。夕部されは

と云事もあり、又夕のさる方も有。されハ夕のさりて

後ハ鵜あわれといへり。暮深時分は鵜の聲を聞

ハ、かれをとらんといそく鷹かいの本意なり。

112 むらさきの毛次もみえぬ朝霧に誰か箸鷹を居て出らん  
〔31オ〕

紫の毛と申ハ尾の上、さ衣の毛の腋ニ候。霧深て、この

毛さへニみえぬに、箸鷹を居出ス事、鷹能出来たる故と申ニヤ。

113 露そく草の花野を分入て鵜立ぬる春の箸たか

是も露ハ消て候。必鵜鷹の折節ハ花のは〔ある〕へく候ニヤ。

114 うら枯の車のわだち草たえて君か御幸の跡のはし鷹

たとへハうら枯ならずとも、車の輪ニ當草有間節に

さしてうら枯なれハ、絶たる事、一定たるへし。扱しられ

ましと、此草のたへたらん跡ニ而鳥ののかれ所あるまし

けれハとて鷹かいの急儀ニて候。

115 柳ちる夕山風の吹時ハ鷹の心そおもひしらるゝ

此心もあらハなるやうに候。然とハいひなから、↓

心ハ野鷹を哀  
〔31ウ〕

とみえたり。不断かいなれたる鷹さへ嵐ハ哀成に、まして

我か物かほと野山の渡る、いか計か此風うかる覧と↓

押はかる成(儀也)、肝フカク候。

116 露のほる夕の草の箸鷹ハ袖こそ柏ふむ木共なれ

彼袖こそ柏と云事、此道の習なれ。たとへハ鷹ハ柏ニ

縁深物也。彼唐より一ノ鷹を渡けるに、柏の紋付たる

衣をふせ衣<sup>ニ</sup>したり。又浪風のあかりしに、柏の

葉をかさすとも云り。彼は鷹<sup>ニ</sup>柏葉ちなみおほく候。

架にもかしはをゆゑハ、柏をふむ木なれと讀<sup>ニ</sup>や。

117 薄毛の鷹いくかへり帰る覧上色見えぬ夕山のかげ

すゝき毛とハ数多山帰となつて、善悪其色みわかぬと

云り。鷹ハけふるをみつからのそひて長久なれハ、すゝ〔32才〕

けたる毛と面おは可意得也。

118 箸鷹のしけみにしはし隠ゐて露<sup>ニ</sup>したしき鶺鴒おそまつ

惣して名鳥なとハ我身をかくし、よく鳥を可取也。

鶺鴒ハ又高くとはぬ物也。下枝などに隠て随分立所を

待と云り。かくろうハ下枝に隠る成（儀）也。つゆの草村

を立鶺鴒なれハ、露<sup>ニ</sup>羽おもく成て、たかくあからされハ

シスエニテ待と申<sup>ニ</sup>や。シスエ、シタエタノコトナルヘシ。

119 霧くらき百舌鳥の草くきそれとなく遠山路を渡る箸たか

もすのくきと申ハ哥道に付ても其しな多き

習有。心有物、人<sup>ニ</sup>あハんとて宿をとゑバ、もすのいたる

里といふ。後に百舌鳥ハ立はなれて、様々その杓計〔32ウ〕

見えたる跡<sup>ニ</sup>もすの入おと（程）こそ里もさたかに存し

たれ、もすたてハ證據なし。扱それとなくといへり。

遠山を渡る箸鷹も一定ハタルトしらされハ、もすの

草くきにたとへも、それとなくと申<sup>ニ</sup>や。

120 来秋も我物かほに箸鷹の夕の岑の羽ならしの影

羽ならしとハ羽をならすと心得たり。二条殿ハ羽を

并るとの給ひキ。然を我物になす時ハ羽をならへ

あまたかす<sup>ニ</sup>て、岑たへたるこそ本意<sup>ニ</sup>て候なれ。

121 冷しくこもつちこへの岑よりも麓の野へにわたる箸鷹

すさまじきみねとハ峯のひとへなるお申候。しかもうら

面そひえて、たにをかまへたる岑也。下より飛あかり〔33才〕

岑<sup>ニ</sup>そひ、一文字に西へ越へ落を（こ）もつち越と云り。

九条の院の被仰しハ、こもつち音とて鳴聲<sup>ニ</sup>有との

たまふ。ゑこひにあらず、又しとゝなきにあらず。聲

色替て切々<sup>ニ</sup>鳴を云と也。この首の時ハ、とうけない

所有と可意得ニヤ。

122 箸鷹の羽ふさもはや色つくや秋の林をくくると思へハ

秋の林は皆艶なれハ、鷹の行姿迄も色つくへきと

面白候ニヤ。哥のたぐい一首の心たて迄候へハ、哥道

のけいこも成へく候ニヤ。

123 露寒朝の山のこい鷹ハ我しめゆひし森より(そ) たつ

しめゆふとハ哥道の言葉也。ほめられて候物を定儀也。〔33ウ〕

必しも驚鷹宵ニつかいにかしたるハその森を

はなれすと言葉も宵ニ鷹ハ森ヨト思ひしに

心のこつく今朝立と讀にや。是も鷹の心に身おなし。

鷹飼ニ我身をなさすしてハしられましく候ニヤ。

124 雁かねの泪の露やたまらん鷹の上毛の打しめる比

此哥見えたる俣也。たとへハかりかねと云物ハやうかの

はまとして八百里有所をしのき来命をすてん

事、いか計かうかるらん。扱鷹の上毛 露にぬれたる

ハ彼鷹かねの泪かと讀ニヤ。

125 冷布山より遠く詠れハ海越に唯鷹そ飛なる

〔34オ〕

此哥みえたる俣なり。(鷹ハ皆嶋國の物に候。↓

秋山などにて、海こし

の嶋を見渡は、皆／たかの飛と申事嶋國の物なれは也。)

126 狩くらすさほしかならす箸鷹の山をはなれつ何ちゆくらん

山をかるにハ、さほしかこそ出る物なれ。さほしかてなけれ

とも、狩はの山ニて鷹お失ひたるハ何方へ行たると

讀迄成にや。

127 内しよある鷹とおもハこつほ成水の露より身をすくへし

こつほとハ竹の切めの水、口とまり、とうけ、内煩といへハ、毛

をわけて、この水をそき、つく息お以て心得有へきニヤ。

128 一夜水一夜の朝箸鷹の露のかことやかけん頼ん

一夜水も土際より一ふしあつて切めの水なり。毛羽

すくむ事あらハ、一夜この露を毛の間ニそけとなり。〔34ウ〕

さて一夜のちきり、つゆの香ことを頼めと讀る。

129 菊の咲山路やよそにかよふ覽はとやの鷹の哀世中

はとやの鷹とハ寿命久しきをいへり。若菊の

咲山なれハ、その露をぶくして久布さかへといへり。

哀世の中とかゝる薬のしたゞりの有山をおゐて外所

にかよへハ、哀世間と申ニヤ。

130 桹せし山路を出る箸鷹ハたか紅をかけてきぬらん

是も桹の山を出れハ鷹の姿紅とみんや。

131 きりくすなく夕暮のさひしきに野山はなれて鷹を飛なる

鷹ハみな夕朝に餌を求物也。人ハ夕の虫の音、き

りくすなと聞ハ哀なると思ふに、箸鷹このことハリ〔35オ〕

もしらす、夕朝ニ飛と讀にや。

132 一夜つゝ鷹あるそのゝなよ竹をきりつく（し）たる秋の明ほの

この心ハ鷹のねきを尋てとる事ニて候。其鷹などに

鷹のねたるをさハかさすして、一ふしつゝ切のけて、

ひきくなして、その俣鷹をとれとの儀也。心をよくし

つめすしてハ、叶ましきニヤ。

133 打つけハ犬をまかせにつかふへし秋の朝戸のくらきの原に

打つ（け）とハ始と言儀也。朝なとつかふニ↓

霧かゝつてくらくハ、その

野に犬を能入て鳥お立、鷹ニ力をつけつかへとニヤ。

134 口こわき馬と思ハ鷹かいよ秋の野末にひかへてもみよ

たとへハ馬上のたか、近代始候。乍去鷹おつかい、↓

鳥ニあひ候

〔35ウ〕

処ニ馬上鷹ハふかくに候。然間野末ニひかへ、馬の心おもしろ

ろをもみつくらふてつかへと申ニヤ。

135 箸鷹の上毛に置く夜の露ハ夢に鶉のなく泪哉

是も、もし鷹の上毛の露ハ夢にも鶉のたか野を侘

たる泪、羽の上に置かと讀也。聞たることくにや。

136 色かふる秋の林に鷹のゐて人の心をたぶらかしけり

是も色付林などに鷹の居木の葉もなけれハ、鷹の

姿あきらかに見たり。扱かれにその身をかけぬ人なき

を心をたぶらかすと讀ニヤ。

137 秋ハまた渡りもて行鳥の中にまきれぬ鷹ハ神の告かも

是も聞たる候也。秋ハ様々の鳥渡る共、鷹にわたる鳥  
〔36才〕  
のなきハ 神のちいかと讀めるニヤ。

138 箬鷹の秋の水田を渡るこそ鳴村鳥の恨みなりけり

是も聞たる如し。鷹の影を見て、いか計うからん  
とはかるにや。

139 秋かけて鳥や(待)鷹の有といへハおきゑの鳩のさそ欺らん

とや鷹おハ秋待物ニて候へハ、必しもとやニてハ鳩を餌ニ  
おく物なれハ、いか様わか身の上なるへきかと、鳩の  
歎涙をよめるニヤ。

140 秋(か)けて霜に落ち葉のほろく<sup>と</sup>迷おりこそ鷹渡なれ

是も鷹上毛に露を置く時分ニ鷹ハ渡物也と古人の  
いひしも三十一字ニつゝけ候ニヤ。  
〔36ウ〕

141 誰植し山のすそ野の(さざれ)荻荻吹風に鷹渡るなり

おき吹風ハしつか成事ニ候。あきなからさゝれ荻などの  
うこきうこかぬ日 必鷹ハ渡るとみえたるニヤ。

142 露なからおりつたへたるとしはこそ忘ぬ家の鷹かいの道

としハとハ三尺六寸に切て鷹の鳥を彼ニゆひ付て

帝王に奉る也。忘ぬ家とハ四家の中よりして奉る

ハ車近(く)参と也。爰を忘ぬ家とハ云。鷹かいの道ハ如此

有へきと讀事奇特にて候。鷹ハ武士の名を頭、私な

らす。能々存分へし。

143 紫の袖をも許せ鷹かいの露 <sup>の古風よきと思へハ一節有</sup>古郷ニかへるとおもへハ

紫の袖とハ六位より従一位迄着させ玉ふ衣也。面を  
〔37才〕

紫にして裏を鳥の子色ニ染也。位高くてめす衣也。

可意得ニヤ。下の句ニよひさと云、惣して鷹かいに私

あらず。又位ひきくて不叶、帝王の御手うつしに鷹

お奉れハ、如此久しく鷹飼になる上ハ、紫の袖を許させ

玉へと望事、家の本意成ニヤ。

144 嵐にハ毛おもふかせし鷹飼の秋の野遠出るなる共

鷹にハ尾羽の養性肝要ニて候。然ハ野深出るとも、嵐ニ毛おも  
ふかせしと覚悟仕る事奇特ニヤ。

145 箬鷹の上毛の露ハ打拂羽くきよハき習をそみる



水をふひてみへし。かひなきハ水のおもさに依ておつへし。

つよきなからむしさしておち、さてハその露を↓

打払ひ、羽

〔37ウ〕

を分てみよと申<sup>ニ</sup>や。この意得 大切なるへし。

146 羽くき唯よハく返せハ箸鷹<sup>ニ</sup>虫しろ草の露やそゝかん

彼虫しろ草とハ田におほる物也。みしかくにかきをいふ。是を

煎して、人もかみをすゝくといへり。彼を煎、いかにもぬるく

して羽にそゝひて、はくきの虫をたやせと讀候<sup>ニ</sup>や。

147 露霜の林を出る箸鷹ハ錦をきたる姿にそにる

露霜の林とハ大裏<sup>ニ</sup>竹川のほとりにあり。其所より

鷹をすへて始を(て)出る人錦の袴おゆるされしと成り。

148 鷹飼のうきを袂<sup>ニ</sup>頭してタハ露を置そかねぬる

鷹飼身ハ少も無油断、やすむ間もなけれハ、袂<sup>ニ</sup>うきを

頭を申<sup>ニ</sup>や。

〔38オ〕

149 いたつらにとるにやな覧箸鷹に狩場の秋の鳥の心ハ

たとへハ箸鷹<sup>ニ</sup>てなす事ハ徒のとか<sup>ニ</sup>ハならぬ也。秋の

校訂『鷹三百首（摂政太政大臣）』（上）（遠藤）

鳥の鳴を鷹にとられす共、何もその時節あひ當ハ、

とかにならぬと申<sup>ニ</sup>や。

150 紅の山を出てハ箸鷹の秋に心にまかせてそとふ

五もしに紅の山と置事ハ須弥の西の麓より

鷹ハ出始、西紅<sup>ニ</sup>染色の山と讀心也。秋ハ西より来て

千草万木を染色<sup>ニ</sup>なせハ秋<sup>ニ</sup>まかせてとふといへり。

（本学教授）